

## 〈研究報告〉

# 女子看護学生の母性看護実習における自己嫌悪感と内省との関連

Association of self-disgust with reflection of female nursing students  
in maternal nursing practicum

一花詩子 米山万里枝

**要 旨：**目的：女子看護学生の臨地実習開始前と母性看護実習中における自己嫌悪感と内省との関連、母性看護実習中に体験した自己嫌悪感と内省の程度を明らかにすることである。

方法：関東近県の短期大学および専門学校に所属する2校の学生のうち、本研究の趣旨を説明し同意の得られた女子看護学生164名に対し、3年次の臨地実習開始前に自己嫌悪感、内省に関する自記式質問紙調査を行った。短期大学の学生（93名）には、母性看護実習中の内省の程度と母性看護実習終了直後に質問紙調査を実施した。

結果：母性看護実習中に自己嫌悪感を体験した人は62名（66.7%）であり、普段から自己嫌悪感を体験する人が臨地実習においても自己嫌悪感を体験する傾向にあった。実習中に体験した自己嫌悪感の内容は「やるべきことを後回しにしてしまう」が一番多く24名（38.7%）であった。また、自己嫌悪感の得点が高い人は、低い人に比べ内省する機会が多く（ $p<0.001$ ）、自分のいやな部分を見ることに抵抗を持つ傾向があった。

結論：女子看護学生の自己嫌悪感の強さと内省の程度には関連があることが示唆された。

**Abstract：**Objective: The purpose of this study was to clarify (1) the association of feelings of self-disgust with self-reflection in female nursing students before starting the on-site practical training and during the maternal nursing training, and (2) the intensity of self-disgust and the degree of self-reflection that they experienced during the maternal training period.

Methods: A self-completed questionnaire survey was conducted on feelings of self-disgust and self-reflection in 164 female nursing students who consented to the study after receiving the explanation among those of a junior college and a nursing vocational college in Kanto area before starting the on-site practical training as a third-year curriculum. For the junior college students ( $n=93$ ), the self-reflection degree during the maternal nursing training was investigated with the training reports written by the trainees during the training course, and an additional questionnaire survey was conducted right after the training.

Results: During the maternal nursing training, 62 students (66.7%) experienced feelings of self-disgust. Those who usually experience feelings of self-disgust were prone to experience such feelings also during the on-site training. The most popular feeling of self-disgust during the training was that "I put off what to do"

as experienced by 24 students (38.7%). Those who score higher in the self-disgust intensity had significantly more opportunities to reflect oneself than those who score low ( $p < 0.001$ ), and they tended to have feelings of resistance against looking at own negative aspect.

**Conclusions:** It was suggested that the self-disgust intensity of the female nursing students and their reflection degree are associated with each other.

**キーワード:** 自己嫌悪感、内省、看護学生、母性看護実習

**Keywords:** self-disgust, reflection, nursing students, maternal nursing practicum

## I. はじめに

青年期は10歳代から20歳代半ばころまでの子どもから大人になる移行期であり<sup>1)</sup>、形態・機能的側面は成熟を迎える。心理・社会的側面の特徴として舟島<sup>2)</sup>は、「劣等感や自分自身に否定的な感情を抱く者も少なくない」と否定的な感情を抱きやすい傾向にあることを述べている。また、佐藤<sup>3)</sup>が「自己嫌悪感を感じることは、青年の心理的特徴としてとらえられてきた」と述べているように、青年期は自己嫌悪を感じる人が多いと考える。

看護の臨地実習は、看護職者が行う実践の中に学生が身を置き、看護職者の立場でケアを行うことである<sup>4)</sup>。文部科学省の看護実践能力育成における臨地実習の意義<sup>4)</sup>では、看護実践に不可欠な援助の人間関係形成能力や専門職者としての役割や責務を果たす能力を培うため重要であること、臨地実習を行う中で学生は成長することが述べられている。本研究自身も看護教員として臨地実習指導にあたる中で学生の成長を日々感じている。しかし、成長の過程において、学生は受け持ち患者をはじめ、多くの人との関わりの中で悩むことや、学習面の問題など様々な困難や壁にぶつかることが多い。看護学生の多くは青年期にあり、上記に述べたような青年期特有の心理・社会的側面を持っているため、臨地実習においては、自己嫌悪を感じやすいのではないかと考える。

母性看護学は、「妊産褥婦および新生児への看護活動に加え、次世代の健全育成を旨とし、母性の一生を通じた健康の維持・増進、疾病予防を目的とした看護活動を支える実践科学」<sup>5)</sup>である。現在、対象は妊産褥婦とその子どもだけでなく、女性とパートナーである男性、子どもが生まれる家族、地域社会も含まれるようになり、母性への支援が質的・量的に変化しており、母性看護の役割は拡大している<sup>5)</sup>。母性看護学

に対して苦手意識を感じたことがある学生が半数以上いるという調査報告<sup>6)</sup>があり、学生が苦手意識をもつ要因には、広い範囲の対象や役割の多さを理解することへの困難があるのではないかと考える。また、浦田ら<sup>7)</sup>の調査より、生殖器の観察や援助を行う際に羞恥心が発生するが、看護学生として援助を行わなければならないという葛藤からの困難や産褥経過等が教科書通りでない場合の判断に困難を感じている。

自己嫌悪感是自己に対する否定的な感情の一つであるが、一方で人格形成上肯定的な意味合いがあるとされている<sup>8)</sup>。水間<sup>9)</sup>は「否定性を直視することができる場合には、自己嫌悪感という体験を、自己を再構成してその否定性を乗り越えていくものとしていける」と述べている。自己嫌悪感是自己形成へとつながる可能性が秘められている<sup>9)</sup>。よって、母性看護実習で自己嫌悪感を体験し、内省できる学生は自己形成や自己の成長につなげることができるかと考える。

自己嫌悪感と内省のあり方について、佐藤<sup>10)</sup>は、高校生も大学生も内省する機会は多いが、高校生は未成熟なため自分の中のいやなところについて考えることから逃避したくなる人が多く、大学生は自己が成長しているため、いやな自分についても目を向けられると述べている。しかし、大学生であっても、困難や壁にぶつかってもスムーズに乗り越えられる学生とそうでない学生がいる。困難や壁にぶつかってもスムーズに乗り越えられる学生を自己が成長している学生、そうでない学生を自己が未熟な学生と仮定すると、自己嫌悪を感じた時の内省の程度に違いがみられるのではないかと考えることができる。しかし、母性看護実習中における学生の自己嫌悪感と内省との関連については明らかになっていない。また、内省の程度が低い学生は自己嫌悪感の体験が辛い体験で終わってしまう可能性がある。辛い体験から自己嫌悪感を持つが、指導を受けることによって、そんな自分を内省することで

成長へとつなげることができるのではないかと考える。

以上のことから、看護学生の自己嫌悪感、内省との関連を明らかにすることにより、実習指導者が学生の傾向を踏まえて、その学生の成長や学生の自己形成の確立に繋げる指導ができることが期待できる。

本研究の目的は、女子看護学生の母性看護学領域の臨地実習開始前と実習中における自己嫌悪感と内省との関連、学生が実習中に体験した自己嫌悪感と内省の程度を明らかにして、実習指導者が指導に役立てることである。

## II. 研究方法

### 1. 対象者

関東近県の短期大学および専門学校に所属する2校の学生のうち、本研究の趣旨を説明し同意の得られた女子看護学生（3年次生）164名（短期大学97名、専門学校67名）。

### 2. データ収集期間

2017年4月から2017年11月。

### 3. 用語の定義

#### 1) 自己嫌悪感

自己に向けられた否定的な感情の一つであり、自分が、自分で、今の自分がいやだと感じること<sup>3)</sup>とした。

#### 2) 内省とその程度

自己を振り返り、自己を見つめること<sup>11)</sup>とする。また、内省の程度は内省する機会の多さと自己の否定的な部分を直視することへの抵抗で構成されるものとした。

### 4. データ収集方法

看護の3学年の4月に自記式質問紙調査を行った。研究依頼の説明後、同意が得られた参加者に質問紙を配付した。研究者のいない教室で回答し、封筒に封入の上その場に設置された回収ボックスに提出を依頼した。短期大学生に対しては、母性看護実習の記録の一部もデータとして使用し、母性看護実習直後に質問紙調査を行った。実習中と実習後の調査は、教育背景の違いによる影響を考慮し、専門学校は除外し短期大学生のみ調査した。実習記録のデータは、成績がつけ終わった後に実習担当者である3名（本研究者および研究協力者である実習担当教員2名）で個人が特定できないようにコード化された日々の記録物からチェックシート（詳細は調査内容参照）を用いて記載した。母性看護実習直後の質問紙調査は、実習最終日、継続し

て調査に同意した参加者に質問紙を講義室で配付した。研究者のいない教室で回答し、封筒に封入の上、指定した回収ボックスに提出を依頼した。

## 5. 調査内容

### 1) 臨地実習前の調査

(1) 調査対象者の年齢、性別

(2) 自己嫌悪感尺度

青年期における自己嫌悪感の特徴を明らかにするために作成されている。本研究では、学生の自己嫌悪感を明らかにするために、佐藤<sup>12)</sup>の自己嫌悪感尺度を用いる。これは、自己嫌悪感尺度144項目から研究内容に沿うと考えた16項目で、回答は「よく感じる/ときどき感じる/たまには感じる/あまり感じない/ほとんど感じない」の5件法で求めるものである。本研究では、各下位尺度ではなく16項目の総合得点（最高80点）で結果を求める。また、自己嫌悪感得点の高さによる比較を行うため、自己嫌悪感の総合得点で高群（63.75点以上）、中群（48.0点～63.74点）、低群（47.9点まで）の3群に分類した。分類方法は四分位法であり、中群は四分位範囲の25～75パーセント値を範囲とする。

(3) 内省尺度

学生の内省の程度を明らかにするために内省尺度を使用する。使用した内省尺度は、佐藤・落合<sup>11)</sup>で作成された15項目を佐藤<sup>10)</sup>が12項目に作成し直したものであり、内省する機会の多さ、自己の否定的な部分を直視することへの抵抗の2種類から構成されている。自己の否定的な部分を直視することへの抵抗を表すものとして作成された項目は、直視することへの抵抗を表す項目と抵抗せず直視する姿勢を表す項目に分かれている。下位尺度は3項目となり、「内省する機会の多さ」、「嫌悪的側面直視への抵抗」、「嫌悪的側面への自己対峙」である。「内省する機会の多さ」は6つ、「嫌悪的側面直視への抵抗」は4つ、「嫌悪的側面への自己対峙」は2つの質問項目からなる。回答は「ハイ/どちらかというハイ/どちらともいえない/どちらかというイエ/イエ」の5件法で求める。質問項目3、4、6、7、8、9は逆転項目であり逆に得点化する。逆転項目が4項目中3項目（項目7、8、9）ある「嫌悪的側面直視への抵抗」は、抵抗が小さいほど得点が高く、抵抗が強いほど得点が低い結果となる。下位尺度の合計得点は「内省する機会の多さ」30点、「嫌悪的側面直視への抵抗」20点、「嫌悪的側面への自己対峙」10点である。

### 2) 臨地実習中の調査

母性看護実習中の自己嫌悪感の体験と内省の程度を

本研究者が作成したチェックシートを用いて記載する。チェックシートは、内省の程度を点数化して分析すること、内省の程度について学生の到達度をみること、チェックシートに記載する実習担当者3名による相違がないようにするため作成したものである。

内省の程度を判断するのは、2週間の母性看護実習のうち、産科外来実習（1日）、新生児看護実習（2日）、褥婦の看護（3～5日）、自己学習または分娩の立ち会い予定日（1日）とし、婦人科外来の見学実習（1日）は除外することとする。

内省の程度を判断するために使用する実習記録は行動計画用紙（実習における日々の行動目標と行動計画、1日の行動目標の評価を学生が記載する用紙）とする。1日の行動目標の評価の欄は「行動目標の評価」とのみ記載されており、記載する内容を指導者が指示する文言はない。日々の実習における自分の行動について評価できる学生は、自己嫌悪感を体験しても内省できると考えたため、内省の程度を行動計画用紙から抽出した。

チェックシートの項目は、実習評価表と使用する内省尺度をもとに、達成の難易度により段階1から段階5までの到達度を設定した。段階別の到達度は以下のとおりである。

- ①段階1：記述の内容が感想ではなく評価が書かれている（1点：感想のみで評価の記述がない、3点：一部の目標に対する評価の記述がある、5点：すべての目標に対する評価がある）
- ②段階2：評価は達成度（達成、一部達成、未達成等）の記述がある（1点：達成度の記述がない、3点：一部の目標に対する達成度の記述がない、5点：すべての目標に対する達成度の記述がある）
- ③段階3：今後の課題の記述がある（1点：課題の記述がない、3点：課題の記述はあるが課題に対する具体的な対策の記述がない、5点：課題の記述があり、課題に対する具体的な対策の記述がある）
- ④段階4：達成度についての根拠が書かれている（1点：根拠の記述がない、3点：一部に根拠の記述がある、または根拠の理由が具体的でない、5点：すべてに根拠の記述があり、根拠の理由も具体的である）
- ⑤段階5：今後の課題について、次の日以降の行動につながっている（1点：行動目標は課題が活かされていない行動目標となっている、3点：行動目標が課題を活かした目標になっている、5点：課題を活かした行動目標について1～4の項目の達成ができていない）

このチェックシートの結果を用い、実習中の内省の程度の到達度（段階1～5）、実習初日と実習最終日の合計得点と到達度を分析する。なお、実習初日の到達度に関しては、段階5についてすることができないため、段階4までとしている。また、行動目標が達成できていない場合において、自己評価以外の内容の記載がないか記録より判断する。

学生が記載した行動目標の評価の記述内容が不十分な場合は、実習担当教員が行動計画用紙の余白にコメントする。本研究ではコメント後の行動を判断するため、コメントの内容は3者間で差が出現しないように次のように統一する。①記載の内容が感想ではなく行動目標の評価となっていない場合は、「記述の内容が行動目標の評価になっていない。行動目標の評価を記述する」、②達成度の記述がない場合は「達成度を記述する」、③達成度の根拠が書かれていない場合は「なぜその達成度となったのか根拠を記述する」、④次の日への課題の記載がない場合は「明日（今後）への課題を記述する」のみの記載とする。

### 3) 母性看護実習終了後の調査

母性看護実習中の自己嫌悪感の体験の有無、体験した自己嫌悪感の回数、どのような自分に自己嫌悪を感じたのか調査する。

## 6. 分析方法

分析には「JMP Pro12」を用いた。統計手法は、記述統計、自己嫌悪感の強さと内省の程度との関連には相関係数の算出と対象を自己嫌悪感尺度の総合得点で高群、中群、低群に分類し、3群間の自己嫌悪感得点、内省尺度得点等についての解析を一元配置分散分析または $\chi^2$ 検定で分析した。分散分析で有意差があると認められた場合はさらにTukeyのHSDの多重比較検定を行った。分析における有意水準は5%とした。

## 7. 倫理的配慮

本研究における倫理的配慮は、東京医療保健大学大学院ヒトに関する研究倫理委員会の承認（院28-49：2017年3月）、埼玉医科大学短期大学倫理審査委員会の承認（第28-34：2017年4月）を得て実施した。対象者には、参加は自由意思であり、参加しなくても今後の成績などには影響しないこと、データとして使用する実習記録の一部は内省の程度を確認するものであり、学生の成績をつけるものではないこと、継続調査の趣旨と継続調査の予定があること、それに伴い、ID番号の付与があること、収集したデータはすべて無記名・記号化し、対象者の氏名およびIDについて照合表を作成のうえ、照合表はデータを取り扱わない

第三者が管理し、データと異なる施設可能な場所で厳重に管理すること、氏名とIDを連結する際は、誤入力がないことを確認後、氏名を消去し、連結不可能匿名化を図ること、また、研究目的以外で使用しないことを説明した。参加の了承を得た者のみ同意書に署名を依頼し、何時でも辞退することができることの保障をするため、同意撤回書を一緒に配付した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 回収率

4月の調査で回収された質問紙は短期大学生99名/108名、専門学校生69名/79名の計168名/187名であった。有効回答率は97.6%であり、164名(短期大学生97名、専門学校生67名)を分析対象とした。母性看護実習終了直後の調査で回収された質問紙は93名/97名であった。有効回答率は100%であり、93名を分析対象とした。

#### 2. 各尺度の信頼性と妥当性の検討

各尺度の得点算出の前に「自己嫌悪感」と「内省」の信頼性と妥当性を検討した。自己嫌悪感尺度の下位項目は9項目で、「他者との親和不能」「他者への対応不均衡」「遂行結果の低迷」「期待の実現不能」については、質問が1項目のためcronbach'α係数は求められなかったが、「他者への配慮欠如」α=0.818、「自己主張性の欠如」α=0.7301、「課題遂行の停滞」α=0.8808、「目標方向不定」α=0.6926、「他者への対抗意識過剰」α=0.8365であり、「目標方向不定」はやや低い、他の項目は信頼性と妥当性が確認され本研究の分析に使用した。また、内省尺度の下位項

目のcronbach'α係数は「内省する機会の多さ」α=0.8323、「嫌悪的側面直視への抵抗」α=0.7943、「嫌悪的側面への自己対峙」α=0.8701であり、信頼性と妥当性が確認された。

#### 3. 対象者の特性

##### 1) 年齢

対象者の年齢は20～22歳の範囲にあり、平均20.2歳(SD=0.5)であった。

##### 2) 性別

「女性」と回答した者は164名(100%)であった。「男性」および「どちらでもない」と回答した者はいなかった。

##### 3) 各尺度の平均得点等について

##### (1) 自己嫌悪感尺度

自己嫌悪感尺度の各項目の平均点、下位尺度得点の平均点を表1に示した。「課題遂行の停滞」の下位尺度の質問項目は他の下位尺度の質問項目よりも平均点が3.8～4.0と全体的に高かった。また、「目標方向不定」の下位尺度の質問項目である「自分のやりたいことが見つからない自分がいやだという感じ」の平均点が2.7と一番低かった。

##### (2) 内省尺度

内省尺度の各質問項目の平均点と下位尺度の平均点を表2に示した。各質問項目の平均点については、大学生のみを対象とした調査はなかったが、佐藤が中学生から大学生までを調査した結果<sup>10)</sup>は、大学生、高校生、中学生別に下位項目を標準因子得点で比較している結果があり、傾向は明らかにすることができると考え、比較検討した(表2)。また、質問項目3、4、

表1 自己嫌悪感尺度：各項目の平均点と下位尺度の平均点

n=164

| 下位尺度       | 項目                              | M±SD    |
|------------|---------------------------------|---------|
| 他者への配慮欠如   | 人を傷つけるようなことを言ってしまう自分がいやだという感じ   | 3.0±1.2 |
|            | 軽はずみなことばで人にいやな思いをさせる自分がいやだという感じ | 3.0±1.1 |
| 自己主張性の欠如   | 自分の気持ちをそのまま正直にあらわせない自分がいやだという感じ | 3.7±1.1 |
|            | 思っていることを人にきちんと伝えられない自分がいやだという感じ | 3.4±1.2 |
| 課題遂行の停滞    | 計画したことを実行できない自分がいやだという感じ        | 4.0±1.0 |
|            | 自分で決めたことをやらずにいる自分がいやだという感じ      | 4.0±1.1 |
|            | だらだら時間をむだに過ごしている自分がいやだという感じ     | 3.8±1.2 |
| 目標方向不定     | なまけている自分がいやだという感じ               | 3.9±1.1 |
|            | 自分が本当にしたいことがよくわからない自分がいやだという感じ  | 3.4±1.2 |
|            | 自分のやりたいことが見つからない自分がいやだという感じ     | 2.7±1.3 |
| 他者への対抗意識過剰 | まわりからどう思われるかを気にしている自分がいやだという感じ  | 3.6±1.2 |
|            | 人からの評価を意識しすぎる自分がいやだという感じ        | 3.4±1.1 |
| 他者との親和不能   | 人とうまくつきあえない自分がいやだという感じ          | 3.1±1.2 |
| 他者への対応不均衡  | 相手によってつきあう態度が変わってしまう自分          | 3.0±1.2 |
| 遂行結果の低迷    | がんばっても成果があがらない自分                | 3.5±1.1 |
| 期待の実現不能    | まわりの期待にそえない自分がいやという感じ           | 3.2±1.2 |

表2 内省尺度：各項目の平均点と下位尺度の平均点 \*印(3,4,6,7,8,9)は逆転項目 n=164

| 下位尺度                | 項目                                 | 今回の調査   | 佐藤 <sup>10)</sup> の調査<br>M±SD | 下位尺度     |
|---------------------|------------------------------------|---------|-------------------------------|----------|
| 内省する<br>機会の<br>多さ   | 1.自分のことを振り返っていろいろ考えるほうだと思う         | 3.8±1.0 | 3.69±1.2                      | 23.3±4.5 |
|                     | 2.自分についていろいろ考えることが多い               | 3.8±1.0 | 3.71±1.19                     |          |
|                     | 3.自分のことを反省したり振り返ったりすることはめったにない *   | 3.8±1.0 | 2.16±1.16                     |          |
|                     | 4.自分自身について考えることはめったにない *           | 4.2±1.0 | 2.33±1.24                     |          |
|                     | 5.自分のしたことや言ったことをあとから思い返してみることが多い   | 4.1±0.9 | 4.08±1.08                     |          |
|                     | 6.自分についてじっくり考えるのは苦手だ *             | 3.3±1.2 | 2.82±1.35                     |          |
| 嫌悪的<br>側面直視<br>への抵抗 | 7.自分の中のイヤなところについては考えたくない *         | 3.5±1.2 | 2.72±1.22                     | 13.4±3.6 |
|                     | 8.自分の中の嫌なところは見たくない *               | 3.3±1.2 | 3.21±1.27                     |          |
|                     | 9.自分の中にあるいやな点に気づくと、それ以上考えたくなくなる *  | 3.5±1.1 | 2.97±1.27                     |          |
|                     | 10.イヤな自分に気づいても、目をそらさずにいられる         | 3.1±1.0 | 2.9±1.16                      |          |
| 嫌悪的<br>側面への<br>自己対峙 | 11.自分のダメなところについてきちんと考えるように心がけている   | 3.7±0.9 | 3.42±1.16                     | 7.4±1.7  |
|                     | 12.自分の中のイヤな部分こそ、ちゃんと見つめて考えるようにしている | 3.5±0.9 | 3.24±1.09                     |          |

6、7、8、9は逆転項目であり、逆に得点化したためすべての項目を佐藤の調査結果と比較することは難しいが、その他の項目では、本研究で調査した女子看護学生の方が「内省する機会の多さ」と「嫌悪的側面への自己対峙」の平均得点は高く、「嫌悪的側面直視への抵抗」の平均得点は低い結果となった。

#### 4. 自己嫌悪感と内省との関連

##### 1) 自己嫌悪感の強さと内省の程度との関連

自己嫌悪感と内省の下位尺度得点をもとに相関係数を算出し、表3に示した。「内省する機会の多さ」との間に弱い正の相関を認めた。

##### (1) 内省する機会の多さ

自己嫌悪感尺度得点高群の平均は24.6±SD3.9点、中群は23.8±SD4.4点、低群は20.8±SD4.6点であった。分散分析の結果、有意差が認められた(F(2,161)=9.0803,  $p<0.001$ )。さらにTukeyのHSDの多重比較検定を行った結果、高群と中群( $p=0.6245$ )には有意差は認められなかったが、高群と低群( $p<0.001$ )、中群と低群( $p<0.01$ )の間に有意差が認められた。

##### (2) 嫌悪的側面直視への抵抗

高群の平均は12.2±SD3.4点、中群は13.8±SD3.7点、低群は13.9±SD3.3点であった。分散分析の結果、有意差が認められた(F(2,161)=3.2378,  $p<0.05$ )が、HSDの多重比較検定を行った結果、ペアごとの有意差は認められなかった(高群と低群: $p=0.0788$ 、高群と中群: $p=0.0547$ 、中群と低群: $p=0.9739$ )。

逆転項目が4項目中3項目あるこの下位項目は、抵抗が小さいほど得点が高く、抵抗が強いほど得点が低い結果となる。よって、3群の中で一番得点が高い高群は抵抗が強い傾向にあるという結果となった。

##### (3) 嫌悪的側面の自己対峙

高群の平均は7.4±SD1.6点、中群は7.1±SD1.7点、低群は7.2±SD1.8点であった。分散分析の結果、有意差は認められなかった(F(2,161)=0.3738,  $p=0.6887$ )。

#### 5. 母性看護実習中に体験した自己嫌悪感と内省の程度

母性看護実習中・実習後の調査対象は93名(短大生のみ)であり、実習前に測定された自己嫌悪感尺度得点で分類した3群の人数の割合は、高群23名(24.7%)、中群50名(53.8%)、低群20名(21.5%)であった。

##### 1) 母性看護実習中の自己嫌悪感の体験

(1) 母性看護実習中における自己嫌悪感の体験の有無

看護実習中に自己嫌悪感を体験した者は62名(66.7%)であり、体験しなかった者は31名(33.3%)であった。

自己嫌悪感得点高群で自己嫌悪感を体験した者は21名(91.3%)、体験しなかった者は2名(8.7%)、中群で体験した者は33名(66.0%)、体験しなかった者は17名(34.0%)、低群で自己嫌悪感を体験した者は8名(40.0%)、体験しなかった者は12名(60.0%)であった。 $\chi^2$ 検定の結果、有意差が認められた( $\chi^2=12.693$ 。

表3 自己嫌悪感と内省の下位尺度との相関関係係数 n=164

|       | 内省の機会の多さ  | 嫌悪的側面直視への抵抗 | 嫌悪的側面の自己対峙 |
|-------|-----------|-------------|------------|
| 自己嫌悪感 | 0.3332*** | -0.1738*    | 0.051      |

\*\*\* $p<0.0001$  \* $p<0.05$

df=2,  $p<0.01$ )。

(2) 母性看護実習中に自己嫌悪感を体験した回数

母性看護実習中に自己嫌悪感を「体験した」と回答した62名が体験した自己嫌悪感の回数は、平均5.08±SD4.5 (1～30) 回であった。体験した回数を1～4回、5～9回、10回以上に分類した。その結果、1～4回は37名 (59.6%)、5～9回は12名 (19.4%)、10回以上は13名 (21.0%) であった。また、自己嫌悪感得点により分けられた群別の割合は、10回以上自己嫌悪感を体験した者は高群が中群、低群に比べ高かったが、 $\chi^2$ 検定の結果、有意な差は認められなかった ( $\chi^2=1.736$ , df=4,  $p=0.7842$ )。

(3) 母性看護実習中に体験した自己嫌悪感の内容

母性看護実習中にどのような自己嫌悪感を体験したかについて、「やるべきことを後回しにしてしまう」24名 (38.7%)、カンファレンスで言いたいことがあるのに発言できないなど「自己主張がうまくできない」12名 (19.4%)、勉強したのにできないなど「成果が表れない」9名 (14.5%)、「知識不足や勉強不足」6名 (9.7%)、「まわりと比べたり、他のせいにしたりする」5名 (8.1%)、であった。その他「人に合わせられない」、「時間を上手に使えない」、「視野を広くして考えることが出来ない」、「他人に言われて気づく、自分で気づけない」、「コミュニケーション能力のなさ」、「無回答」が各1名 (9.6%) であった。

2) 母性看護実習中の内省の程度

(1) 母性看護実習中におけるチェックシートによる

到達度の確認

母性看護実習において、学生がどの段階まで到達したのか、自己嫌悪感得点によって分けられた3群で人数と割合を算出した (表4)。前日は段階4まで到達しても、翌日は段階3までしか到達できないなど、到達できる段階が日によって変化することがあり、必ずしもその段階を維持またはそれ以上の段階に上がるとは限らなかった。そのため、2週間の実習の中で最も高い到達段階で算出した。なお、各項目の点数は5点満点であったため、5点満点でその段階を到達できたとした。到達度は、段階5まで到達した者が37名 (39.8%)、段階4までが51名 (54.8%)、段階3までが5名 (5.4%) であった。到達度について、自己嫌悪感得点によって分けられた3群間 ( $p=0.9150$ ) で  $\chi^2$  検定を行った結果、有意な差は認められなかった。

(2) 実習初日の合計点と到達度

実習中の内省の程度の得点による比較は、欠席等、学生により実習の出席日数が違うことから、全ての日数の得点の合計点を算出すると実習の出席日数が少ない学生は点数が低くなるため、チェックシートの各項目の点数の合計点からの平均で結果を算出した。

実習初日の到達度と合計点 (4項目) について表5に示した。実習初日の到達度について、段階4まで到達した者は20名 (21.5%)、段階3までが30名 (32.6%)、段階2までが2名 (2.2%)、段階1までが31名 (33.7%)、段階1も到達しなかった (段階0とする) 者は10名 (10.9%) であった。自己嫌悪感得点によって分けられ

表4 振り返りチェックシートにおける到達度の人数と割合 (自己嫌悪感得点による3群比較)

n=93 (短大生のみ)

|         |    | 振り返りチェックシートにおける到達度 |              |              |              |              | p 値    |
|---------|----|--------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------|
|         |    | 段階 1<br>n(%)       | 段階 2<br>n(%) | 段階 3<br>n(%) | 段階 4<br>n(%) | 段階 5<br>n(%) |        |
| 自己嫌悪感得点 | 高群 | 0(0%)              | 0(0%)        | 2(8.7%)      | 12(52.2%)    | 9(39.1%)     | 0.9150 |
|         | 中群 | 0(0%)              | 0(0%)        | 2(4.0%)      | 27(54.0%)    | 21(42.0%)    |        |
|         | 低群 | 0(0%)              | 0(0%)        | 1(5.0%)      | 12(60.0%)    | 7(35.0%)     |        |

$\chi^2$  検定

表5 実習初日：到達度 (段階) の人数と割合、合計点 (4項目) の平均 (自己嫌悪感得点による3群比較)

n=93 (短大生のみ)

|         |    | 振り返りチェックシートにおける到達度 |              |              |              |              | 合計点<br>(M±SD) | p 値    |
|---------|----|--------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|---------------|--------|
|         |    | 段階 0<br>n(%)       | 段階 1<br>n(%) | 段階 2<br>n(%) | 段階 3<br>n(%) | 段階 4<br>n(%) |               |        |
| 自己嫌悪感得点 | 高群 | 3(13.0%)           | 7(30.4%)     | 1(4.4%)      | 8(34.8%)     | 4(17.4%)     | 11.6±         | 0.8504 |
|         | 中群 | 5(10.0%)           | 20(40.0%)    | 1(2.0%)      | 12(24.0%)    | 12(24.0%)    | 12.0±         |        |
|         | 低群 | 2(10.0%)           | 4(20.0%)     | 0(0%)        | 10(50.0%)    | 4(20.0%)     | 12.1±         |        |

一元配置分散分析

た群別の到達度については、低群が高群・中群に比べ、段階3以上まで達する学生が7割と高かったが、 $\chi^2$ 検定の結果、3群間に有意な差は認められなかった( $p=0.6144$ )。

実習初日の合計点の平均は $11.9 \pm SD3.6$ 点であった。自己嫌悪感得点によって分けられた群別では、高群が $11.6 \pm SD3.5$ 点、中群が $12.0 \pm SD3.7$ 点、低群が $12.1 \pm SD3.5$ 点であり、分散分析の結果、3群間に有意な差は認められなかった( $p=0.8504$ )。

### (3) 実習最終日の合計点と到達度

最終日の到達度と合計点(5項目)について表6に示した。実習最終日の到達度は、段階5まで到達した者が9名(9.7%)、段階4までが72名(77.4%)、段階3までが1名(1.1%)、段階2までが4名(4.3%)、段階1までが3名(3.2%)、段階1も到達しなかった(段階0)者は4名(4.3%)であった。

自己嫌悪感得点によって分けられた群別の到達度について、高群は段階5まで到達した者が2名/23名(8.7%)、中群は4名/50名(8.0%)、低群は3名/20名(15.0%)であり、低群の者は段階3以上まで到達していた。 $\chi^2$ 検定の結果、3群間に有意な差は認められなかった( $p=0.1602$ )。

最終日の合計点の平均は $18.5 \pm SD3.3$ 点であった。自己嫌悪感得点によって分けられた群別の平均点は、高群が $18.3 \pm SD2.8$ 点、中群が $18.3 \pm SD3.6$ 点、低群が $19.4 \pm SD3.1$ 点であり、分散分析の結果、有意な差は

認められなかった( $p=0.4117$ )。

### (4) 実習初日と最終日の合計点の比較

実習初日と最終日の合計点の平均を比較検討した。最終日の合計点は初日と同じ項目5以外の4項目の合計とした。全体の平均点は、初日11.9点、最終日16.9点、平均点の差は $5.0 \pm SD4.2$ 点であった。

自己嫌悪感得点によって分けられた群別の平均点の差は高群 $5.0 \pm SD4.9$ 点、中群 $4.8 \pm SD4.1$ 点、低群 $5.5 \pm SD3.8$ 点であった(表7)。分散分析の結果、有意な差は認められなかった( $p=0.8032$ )。

(5) 実習記録へ教員がコメントした後の追加・修正教員のコメントを見て、後日実習記録に追加・修正した者は19名(20.4%)、追加・修正しなかった者は74名(79.6%)であった。自己嫌悪感得点の群別でみると追加・修正した者は、高群は6名(26.1%)、中群は10名(20.1%)、低群は3名(15.0%)であり、 $\chi^2$ 検定の結果、有意な差は認められなかった( $p=0.6633$ )。

### (6) 行動目標の評価欄への自己評価以外の内容の記載

行動目標が達成できていない場合において、自己評価以外の内容を記載した者はいなかった。

## IV. 考察

### 1. 各尺度の平均得点等について

#### 1) 自己嫌悪感尺度

「課題遂行の停滞(自分で決めたことをやらずにい

表6 実習最終日:到達度(段階)の人数と割合、合計点(5項目)の平均(自己嫌悪感得点による3群比較)

|         |   | 振り返りチェックシートにおける到達度 |         |          |         |           |          | 合計点<br>(M±SD) | p値     |
|---------|---|--------------------|---------|----------|---------|-----------|----------|---------------|--------|
|         |   | 段階0                | 段階1     | 段階2      | 段階3     | 段階4       | 段階5      |               |        |
|         |   | n(%)               | n(%)    | n(%)     | n(%)    | n(%)      | n(%)     |               |        |
| 自己嫌悪感得点 | 高 | 0(0%)              | 1(4.4%) | 3(13.0%) | 0(0%)   | 17(73.9%) | 2(8.7%)  | 18.3±2.8      | 0.4117 |
|         | 中 | 4(8.0%)            | 2(4.0%) | 1(2.0%)  | 0(0%)   | 39(78.0%) | 4(8.0%)  | 18.3±3.6      |        |
|         | 低 | 0(0%)              | 0(0%)   | 0(0%)    | 1(5.0%) | 16(80.0%) | 3(15.0%) | 19.4±3.1      |        |

一元配置分散分析

表7 振り返りチェックシートにおける実習初日と実習最終日の合計点(4項目)(自己嫌悪感得点による3群比較)

|                 | 自己嫌悪感得点  |          |          |
|-----------------|----------|----------|----------|
|                 | 高群       | 中群       | 低群       |
| 実習初日の合計点(M±SD)  | 11.6±3.5 | 12.0±3.7 | 12.1±3.5 |
| 実習最終日の合計点(M±SD) | 16.6±2.4 | 16.8±3.2 | 17.6±2.2 |
| 合計得点の差(M±SD)    | 5.0±4.9  | 4.8±4.1  | 5.5±3.8  |
| p値              | 0.8032   |          |          |

一元配置分散分析

るなど)」の下位尺度の得点が他の下位尺度得点よりも高い結果であった。佐藤<sup>10)</sup>は、「大学生の多くが感じている自己嫌悪感、価値の低い自分に対して感じられるのではなく、自分で自分を統制しようとしているながら、それを達成することができない自分に対して感じられる感情である」と述べている。このことより、佐藤の研究対象者と同世代である看護学生は「課題遂行の停滞」の下位尺度得点が高いのではないかと考える。しかし、「目標方向不定」の下位尺度項目である「自分のやりたいことが見つからない自分がいやだという感じ」の得点は佐藤の研究対象者より低かった。本研究の対象者は、看護師になることを目指し学習を継続しているため、「目標方向不定」について自己嫌悪は感じにくいと考える。

## 2) 内省尺度

本研究の女子看護学生は、佐藤<sup>10)</sup>が調査した中学生から大学生までの結果に比べ、「内省する機会の多さ」と「嫌悪的側面の自己対峙」の平均得点が高く、「嫌悪的側面直視への抵抗」の平均得点は低かった。同調査<sup>10)</sup>では、大学生のみの内省尺度の平均点が示されておらず一概に比較はできないが、大学生は「内省する機会の多さ」と「嫌悪的側面の自己対峙」の標準因子得点が中学生、高校生よりも高く、「嫌悪的側面直視への抵抗」の標準因子得点は低かった。従って、一般の大学生と同様に、中学生、高校生よりも自己が成長していると考えられる。

## 2. 自己嫌悪感と内省の程度との関連

自己嫌悪感得点の高群は内省する機会が多いという結果であり、自己嫌悪感の強さと内省の機会の多さは相関していることが明らかとなった。振り返りの機会が多い者は、自己を見つめるたびに自分のいやな部分もみることになり、自己嫌悪を感じやすくなるのではないかと考える。また、本研究の結果では有意差はみられなかったものの、高群は嫌悪的側面直視への抵抗が大きく、低群は内省の機会が少なく、嫌悪的側面直視への抵抗が小さかった。佐藤<sup>10)</sup>は大学生の内省のあり方と自己嫌悪感について、「嫌悪的側面直視への抵抗の大きさが、自己嫌悪感を感じさせることに果たす役割が大きくなる」と述べており、今回調査対象の学生も同様であると考えられる。また内省の機会が少なく、嫌悪的側面直視への抵抗が小さい者について「内省をすることも少ないがいやな自分をみるにも抵抗はないという心理状態は、自己が成長し、成人の自己に近づいたことで到達できる心理状態ではないか」<sup>10)</sup>と考察している。よって、低群の者は自己が成長している状態であると考えられる。

## 3. 母性看護実習中に体験した自己嫌悪感と内省の程度

### 1) 母性看護実習中に学生が体験した自己嫌悪感

約7割弱の学生が母性看護実習中に自己嫌悪感を体験していた。その中でも自己嫌悪感得点高群の者が中群・低群に比べ自己嫌悪感を体験した者の割合が多く、体験した回数も多かった。実習前と中は、同一対象者を追った縦断的調査ではなく、時期別での結果であるため一概には言えないが、普段からあまり自己嫌悪感を体験しない者は実習中も体験することは少なく、普段から自己嫌悪感を体験しやすい者は実習中も体験しやすい傾向があることが明らかとなった。

また、母性看護実習中にどのような自分に自己嫌悪を感じたかについては、「やるべきことを後回しにしてしまう」、「自己主張がうまくできない」、「成果が表れない」が多かった。本研究者が予測した母性看護の苦手意識からくる自己嫌悪感、苦手意識から学習が進まず、「やるべきことを後回しにしてしまう」自分がいやだと感じたのではないかと考える。しかし、生殖器の観察や援助を行う際の羞恥心からくる自己嫌悪感はなかった。前述したように、大学生の多くが感じている自己嫌悪感、価値の低い自分に対して感じられるのではなく、自分で自分を統制しようとしているながら、それを達成することができない自分に対して感じられる感情である<sup>10)</sup>とされている。このことから、母性看護実習中に体験した自己嫌悪感「やるべきことを後回しにしてしまう」、「自己主張がうまくできない」、「成果が表れない」が多かったと考える。

### 2) 母性看護実習中の内省の程度

自己嫌悪感高群・中群・低群の3群において、実習初日に比べ最終日のチェックシートの合計点が高かった。実習記録に記載された教員のコメントを見て、後日実習記録に追加・修正した者は2割程と少ないため、学生自身が実習の中で何かを学び取り内省できるようになったと考える。しかし、内省の程度について到達する段階が、段階5まで到達したにも関わらず、最終日は到達する段階が下がる者もあり、日によって到達する段階が前後する者が多かった。このことは、母性看護実習の2週間のうち、1週間は褥婦を継続して受け持つが、もう1週間は外来や新生児室等、ほぼ毎日実習場所が変わる。そのため学生は、前日に記載した今後(明日)への課題を次の日に活かすことが難しかったのではないかと考える。今後、実習の組み方等検討が必要であるが、現在変更することは難しい。実習場所は違っていても次の日に課題を活かし、学びを繋げることが出来るよう、教員及び臨地実習指導者の介入が必要であると考えられる。

また、継続して1週間褥婦を受け持つ週においても、前日の課題を活かすことができない者が多く、教員のコメントを見て後日実習記録に追加・修正した者も少なかった。青木は自己嫌悪に遭遇した際、他者の考えを受け入れることがより良い自己形成につながると述べている<sup>13)</sup>。よって、課題を次の日に活かせるよう、その日のうちに学生間でカンファレンスを行うことや教員や臨地実習指導者と振り返りを行う必要があると考える。学生が毎日振り返りを行い、その日の課題を次に活かすことができれば、振り返りの意味を理解することができ、対象者へより良いケアを行うことができると考える。

### 3) 実習中の内省の程度と自己嫌悪感との関連

実習中の内省の程度は、全体的に自己嫌悪感高群の点数が低く、内省の程度が低い傾向にあったが、高群・中群・低群に有意な差はみられなかった。自己嫌悪感が高く内省の程度が低い者は、実習中の自己嫌悪感の体験が辛い体験で終わってしまう可能性がある。松尾は、経験から学ぶ力を高めるには、問題意識をもって、新規な課題へ取り組むこと、行為を振り返ることで知識・スキルを身につけること、やりがいや意義を見つけることが必要であると述べている<sup>14)</sup>。指導者は学生が辛い体験で終わることなく、これら3つの学ぶ力を引き出し、成長につなげることができるように関わりをもつことが望ましいと考える。

以上のことから、本研究の結果は、学生が体験した自己嫌悪感と内省の程度が明らかとなり、実習指導者が指導に役立てることができると考える。

## V. 研究の限界と今後の課題

実習中の内省の程度を学生の記録から抽出したが、行動目標の振り返りは1日の行動レベルでの評価であり、測るには限界があった。母性看護実習の目標の達成度などは、日々だけでなく母性看護実習全体である2週間を通した振り返り、さらに、他の領域の実習を含めた期間での学生の振り返り内容から、成長の確認も重要であると考えられる。

また、本研究の結果から、自己嫌悪感得点が高い者は内省することは多いが、自分の嫌な部分を見ることに抵抗をもつ傾向があり、自己嫌悪感が強い者は内省できない傾向があることが示された。本研究では、実習指導者が行う自己嫌悪感が強い者に対する具体的な介入方法や振り返りにかける時間などは検討していない。今後、実習指導者が行う自己嫌悪感が強い者に対する指導の場面において、学生が抵抗感なく学習を進めることができ、成長に繋げていく実習指導方法につ

いて検討していくことが必要と考える。

## VI. 結論

本研究では女子看護学生の自己嫌悪感と内省について調査した結果、自己嫌悪感と内省は関連があることが示唆された。自己嫌悪感が高い者は内省することが多いが、自分のいやな部分を見ることに抵抗をもつ傾向があり、自己嫌悪感が低い者は、内省の程度が高い傾向にあることが示された。

自己嫌悪感を体験することは、否定的な側面だけでなく、自己の成長を促す側面をもっているため、自己嫌悪感が高く内省の程度が低い者に対して、日々の振り返りを強化するなど、実習指導者側により丁寧な係わりが望まれる。

臨地実習開始前と実習中における自己嫌悪感と内省との関連、学生が実習中に体験した自己嫌悪感と内省の程度は、実習指導者が指導に役立てることができる指標となることが明らかとなった。

## 謝辞

本研究にご協力いただいた学生の皆様に深く感謝申し上げます。

なお、この論文は修士論文の一部に加筆・修正を行ったものである。

## 引用文献

- 1) 久世敏雄. 青年期とは. 於:久世敏夫, 齋藤耕二監修, 福富護ら編. 青年心理学辞典. 東京: 福村出版. 2000;4-5.
- 2) 舟島なをみ. 第7章 青年期の心と身体.看護のための人間発達学 第4版.東京: 医学書院. 2011;169-195.
- 3) 佐藤有耕. 青年期における自己嫌悪感の発達の变化. 教育心理学研究. 1994;42(3):10-17. doi:10.5926/jjep1953.42.3\_253
- 4) 文部科学省.看護学教育の在り方に関する検討会報告. [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm#top](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm#top) 検索日 2017.3.2.
- 5) 森恵美, 高橋眞理, 工藤美子他. はしがき. 於 森恵美著. 系統看護学講座 専門分野II 母性看護学2. 東京: 医学書院 2017;1-2.
- 6) 山口静江. 母性看護学に対する苦手意識の形成要因と軽減要因. 第43回日本看護学会論文集 母性看護. 2013;84-87.
- 7) 浦田一美, 齊藤ひさ子. 母性看護学実習における看護

- 学生の困難感. 母性衛生. 2014;553:203.
- 8) 元好理恵. 自己嫌悪感と自我同一性との関連. 日本教育心理学会総会発表論文集. 2004;13:112-113.
- 9) 水間玲子. 自己嫌悪感と自己形成の関係について—自己嫌悪感場面で喚起される自己変容の志向に注目して—. 教育心理学研究.2003;51:43-53. doi:10.5926/jjep1953.51.1\_43
- 10) 佐藤有耕. 自己嫌悪感とそれに関連する要因の変化でみた青年期から成人期への発達過程.筑波大学心理学研究. 2001;23:139-152.
- 11) 佐藤有耕, 落合良行. 大学生の自己嫌悪感に関連する内省の特徴.筑波大学心理学研究. 1995;17:61-66.
- 12) 佐藤有耕. 2次元でとらえた青年期の自己嫌悪感の発達過程. 青年心理学究. 1997; 9:1-18. doi: 10.5926/jjep1953.42.3\_253
- 13) 青木多寿子, 武内研人, 吉岡真梨子. 自己嫌悪感場面で喚起される自己変容の志向と自己形成. 学習開発学研究. 2015;8:43-47. doi:10.15027/36761
- 14) 松尾睦. プロフェッショナルへの成長プロセス 経験学習の観点から. スポーツ教育学研究. 2012;31(2):27-32.